

旅の仲間 ノルウェー

昔むかし、あるところに、お百姓の若者がいました。

ある晩、若者は、ミルクのように白くて血のように赤い、それはそれは美しいお姫さまと結婚する夢を見ました。お姫さまは、はるか遠い国に住んでいて、たいへんなお金持ちでした。

目が覚めてからも、若者は、お姫さまが目の前に立っているような気がして、この人と結婚しなければ、生きているねうちがないように思えました。そこで、家も畑も何もかも売り払って、お姫さまをさがして旅に出ました。

長いこと旅を続けて、冬になるころ、若者はある国にやって来ました。そこは、道という道が、まっすぐにのびていて、曲がるということがありませんでした。その国をさまよい続けて、三か月がたちました。

ある町まで来ると、教会のそばに、氷の柱が立ててあって、中に、死体がひとつ閉じこめてありました。町の人たちは、そこを通りかかるたびに、それに向かってつばをはきかけるのでした。

若者は、教会の牧師さまに、

「みんなはどうしてあの人につばをはきかけるんですか」とたずねました。牧師さまは、「あの人はひどい罪をおかしたので、死刑になって、ああやって見せしめにされているんですよ」といいました。

「どんな罪をおかしたのですか」

「あの人は生きているとき、酒屋をしていたんだが、ワインに水をまぜて、ごまかしたんですよ」

若者は、ワインに水をまぜるくらい、そんなにひどい悪事だとは思えませんでした。そこで、

「でも、命で罪をつぐなつたんだから、今は、お墓で安らかに眠らせてあげればいいでしょう」といいました。けれども、牧師さまは、それはどうしてもできないのです。なぜなら、氷の柱を割って男を出し、お墓を買って、お葬式をするにはお金がかかるからです。

「こんな罪人のために、だれがそんなお金を出すでしょう」

それを聞くと、若者はいいました。

「ぼくがお金を出します」

そこで、罪人のためにお葬式をすることになりました。

氷の柱がこわされて、死体が清められてお墓に入れられ、町の人たちの飲んだりさわいだりが終わると、若者はその支払いをすべて引き受けました。若者のポケットには、お金がほとんど残りませんでした。

若者は、旅を続けました。いくらか行かないうちに、ひとりの男が追いついてきて、「あなた、ひとりで旅をするのは、たいくつじゃありませんか」とききました。

「いいえ。ぼくは、いつも何やかや考え事をしていますから」

若者が答えると、男は、

「それなら、召し使いはいりませんか。わたしが召し使いになりましょう」といいました。

「いいえ。召し使いなんていりませんよ。ぼくは、自分のことは自分でするし、第一、お給料をはらうお金がない」

「いや、あなたには、あなたの生き死にを任せられる召し使いが必要です。もし、召し使いはいらないというなら、わたしをあなたの旅の仲間にしてください。とっても役に立ちますよ。お給料もいらなし、食べる物も着る物も気にしてくれなくてけっこうです」

こうして、男は、若者の旅の仲間になりました。ふたりはいっしょに旅を続けました。たいていは男が先に立って道案内しました。

ふたりは、丘を越え森を抜けて、国から国へと歩きつづけ、けわしい山の尾根に着きました。男は、岩をたたいて開けてくれといいました。すぐに、岩の戸が開きました。ふたりが、中に入っていくと、年とった魔女がいて、いすをすすめてくれました。

「このいすにおすわり。くたびれているようだから」

男は、魔女に、

「おまえがすわれ」といいました。すると、魔女は、すわらずにはいられなくなつて、いすにすわりました。そして、そのままいすにくっついてしまいました。そのいすは、すわった人を離さない、まほうのいすだったのです。

男は、丘の中を見渡して、ひとふりの剣がドアの上にかかっているのを見つけました。

「この剣をくれたら、おまえをいすから離してやるよ」と、男がいうと、魔女は金切り声をあげました。

「だめだ。ほかの物なら何でもやるが、それだけはだめだ。それは、三姉妹の剣なんだ。わしひとりの物じゃない」

「そうか。じゃあ、この世の終わりまで、そのいすにすわっているんだな」

男がいうと、魔女はしぶしぶ承知しました。ふたりは剣を手に入れて、丘から出て行きました。しばらくすると、魔女のおしりはいすから離れました。

若者と男は、どこまでも旅を続け、はげ山を越え、荒れ地を過ぎて歩いて行きました。やがて、また、けわしい山の尾根に着きました。男が岩をたたくと、すぐに岩の戸が開きました。ふたりが中に入っていくと、年とった魔女が、いすをすすめてくれました。

「このいすにおすわり。くたびれているようだから」

男が、

「おまえがすわれ」というと、魔女は、すわらずにはいられなくなつて、いすにすわりました。そして、そのままいすにくっついてしまいました。

男は、戸だなや引き出しを探して、金の糸玉を見つけました。

「この金の糸玉をくれたら、おまえをいすから離してやるよ」

「だめだ。ほかの物なら何でもやるが、それだけはだめだ。それは、三姉妹の金の糸玉なんだ。わしひとりの物じゃない」

「そうか。じゃあ、この世の終わりまで、そのいすにすわっているんだな」
魔女はしぶしぶ承知しました。ふたりは、金の糸玉を手に入れて、丘から出て行きました。しばらくすると、魔女のおしりはいすから離れました。

若者と男は、どこまでも旅を続け、荒れ地を過ぎ、森を抜けて歩いて行きました。やがて、また、けわしい山の尾根に着きました。男が岩をたたくと、すぐに岩の戸が開きました。ふたりが中に入っていくと、年とつた魔女が、いすをすすめてました。

「このいすにおすわり。くたびれているようだから」

男が、

「おまえがすわれ」というと、魔女は、すわらずにはいられなくなって、いすにすわりました。そして、そのままいすにくっついてしまいました。

男は、たいして探さないうちに、ドアの後ろのくぎに、古いぼうしがかかっているのを見つけました。

「このぼうしをくれたら、おまえをいすから離してやるよ」

「だめだ。ほかの物なら何でもやるが、それだけはだめだ。それは、三姉妹のぼうしなんだ。わしひとりの物じゃない」

「そうか。じゃあ、この世の終わりまで、そのいすにすわっているんだな」

魔女はしぶしぶ承知しました。ふたりは、ぼうしを手に入れて、丘から出て行きました。しばらくすると、魔女のおしりはいすから離れました。

ふたりは、どんどん歩いて、やがてある入り江にやってきました。男は、金の糸玉をとり出して、むこう岸に向かって力いっぱい投げました。金の糸玉は、むこうの岩に当たってはね返って来ました。男はまた投げました。糸玉は、こちらの岸とむこうの岸を行ったり来たりして、じきに金の橋ができました。ふたりは、その橋をわたりました。むこう岸に着くと、男がいました。

「急いで、糸をたぐりよせなさい。魔女たちにつかまったら、ひきさかれて食べられてしまう」

若者は、できる限りの速さで糸をまきました。とうとう糸があと一本になったとき、三人の魔女が追いかけて来ました。魔女たちは、水に飛びこんで、糸のはしをつかもうとしました。けれども、つかみそこなって、水におぼれてしまいました。

ふたりはまた旅を続けました。

やがて、若者が夢に見たお姫さまのお城にやってきました。男はいいました。

「さあ、中へ入って行きましょう。そして、王さまに、お姫さまと結婚する夢を見てやって来たと話さない」

お城の中に入って行って、王さまに話をする、ふたりは、心から歓迎を受けました。夕食のとき、若者は王さまのとなりにすわりました。目の前にお姫さまがいて、若者は、これこそ夢に見たお姫さまだと心がふるえました。

「わたしは、あなたの夢を見て、ここまでやって来ました」

若者がいうと、お姫さまは、

「わたしも、あなたを気に入りました。でも、わたしと結婚するには、三つの試験を通らなければなりません」といいました。そして、若者に、金のはさみを渡して、いいました。

「ひとつ目の試験は、この金のはさみを持っていることです。決してなくさないで、明日の正午にわたしに返してください。もしなくしてしまったら、あなたは、からだを八つ裂きにされ、頭はくいにさされてお城の門にさらされます。それが決まりなのです」

若者は、

（たいして難しい試験じゃないぞ）と思いました。ところが、お姫さまと楽しく遊んでいるうちに、若者は、金のはさみのことをすっかり忘れてしまいました。お姫さまは、若者が気がつかないうちに、そつとはさみを盗んでかくしてしまいました。

夜になって部屋にもどると、若者は、男に、お姫さまが、金のはさみをなくさないで持っているようにといったことを話しました。男は、

「もちろん、あなたははさみを持っているでしょうね」とききました。若者は、ポケットというポケットを探しましたが、はさみは見つかりませんでした。男は、

「だいじょうぶ。わたしが、はさみを取りもどしてあげましょう」といいました。

男は、家畜小屋に行きました。そこには、お姫さまがかつている大きなヤギがいました。ヤギは、陸を走るより何倍も速く空を飛ぶことができました。男は、三姉妹の剣をとり出して、ヤギの角の間をひと打ちしていいました。

「お姫さまは、今晚、何時に恋人の所へ行くんだ」

ヤギは、メエと鳴いて、そんなことはいえないといいました。けれども、男が、もうひと打ち打つと、ヤギは、いいました。

「お姫さまは、十一時におれに乗りに来る」

そこで、男が、三姉妹の帽子をかぶると、とたんに姿が見えなくなりました。男が待っていると、お姫さまがやって来ました。お姫さまは、大きな角に入ったぬりぐすりをヤギの体にぬり付けました。それから、ヤギの背中に乗って、いいました。

「そら行け。屋根を越えて塔を越えて、大地を越えて海を越えて、丘を越えて谷を越えて、山でわたしを待っている恋人のもとへ」

ヤギは、すぐさま飛び立ちました。男はヤギの後ろに飛び乗りました。ヤギは、風のように空を飛んで、たちまちトロールの山に着きました。お姫さまが三度戸をたたくと、山の戸が開き、ヤギは、トロールのすみかに入って行きました。

「ねえ、あなた。また新しい若者が、結婚を申しこみに来たわ。その人は、若くて美しいけれど、あなたほどじゃないわ」と、お姫さまは、トロールにいました。そして、「その若者に、この金のはさみをなくさず持っているようにいったんだけど、あなたが持っていてくださいな」といって、はさみをトロールにわたしました。

「いいとも、おれが花嫁の腕の中で眠っているあいだに、からすがそいつの骨をつつく

ってわけだな」

お姫さまとトルルは、嬉しそうに笑いました。

トルルは、金のはさみを、鉄の箱にしまいました。箱には、かぎが三つも付いていました。ところが、男が、箱の中から、はさみをすばやくひったくりました。トルルは気づかないで、ふたを閉めてかぎをかけ、三つのかぎを虫歯の穴の中に隠しました。

やがて、お姫さまはヤギに乗って、お城に帰って行きました。男もお姫さまのうしろに乗って帰りました。

つぎの日の正午、若者は、王さまのテーブルに呼ばれました。昼食の後、お姫さまは、いいました。

「きのうの金のはさみを持っていますか」

「ええ。ここにありますよ」

若者はそういつて、金のはさみをテーブルの上に投げ出しました。お姫さまは、腹を立てましたが、やさしい声でいいました。

「いいでしょう。じゃあ、今度は、金の糸玉をあずけますから、あしたの正午にわたしに返してください。もしなくしてしまったら、あなたは、からだを八つ裂きにされ、頭はくいにさされてお城の門にさらされます」

若者は、

（今度もたいして難しい試験じゃないぞ）と思いました。ところが、お姫さまと楽しく遊んでいるうちに、若者は、金の糸玉のことをすっかり忘れてしまいました。お姫さまは、金の糸玉を盗んでかくしてしまいました。

夜になつて部屋にもどると、若者は、男に、お姫さまが、金の糸玉をなくさないで持っているようにといったことを話しました。男は、

「もちろん、あなたは糸玉を持っているでしょうね」とききました。若者は、ポケットというポケットを探しましたが、糸玉は見つかりませんでした。

「だいじょうぶ。わたしが、糸玉を取りもどしてあげましょう」

男は、鍛冶屋に行つて、剣に十二ポンドの鉄をくつつけさせました。それから、家畜小屋に行つて、その剣でヤギの角の間をガンと打つていいました。

「お姫さまは、今晚、何時に恋人の所へ行くんだ」

ヤギは、

「お姫さまは、十二時に乗りに来る」と答えました。

男が、三姉妹の帽子をかぶつて待つていると、お姫さまがやつて来ました。

「そら行け。屋根を越えて塔を越えて、大地を越えて海を越えて、丘を越えて谷を越えて、山でわたしを待つている恋人のもとへ」

ヤギは、すぐさま飛び立ちました。男はヤギの後ろに飛び乗りました。ヤギは、風のように空を飛んで、たちまちトルルの山に着きました。お姫さまが三度戸をたたくと、山の戸が開きました。

「きのうの金のはさみはどこにあるの。若者が持っていたのよ」と、お姫さまはさげび

ました。

「そんなはずはない」と、トロルはいつて、鉄の箱の三つのカギを外しました。中に、金のはさみはありませんでした。

お姫さまは、

「今度は、その若者に、この金の糸玉を持っているようにいったんだけど、でも、きつとまたとりもどすに違いない」といいました。ふたりは相談して、金の糸玉を燃やしてしまうことにしました。ところが、ふたりが糸玉を火に投げ込もうとした瞬間、男がひったくつてしまいました。お姫さまもトロルも、気がつきませんでした。

やがて、お姫さまはヤギに乗って、お城に帰って行きました。男もお姫さまのうしろに乗って帰りました。

つぎの日の正午、若者は、王さまのテーブルに呼ばれました。昼食の後、お姫さまは、いいました。

「きのうの金の糸玉を持っていますか」

「ええ。ここにありますよ」

若者は、金の糸玉をテーブルの上に投げ出しました。お姫さまは、死人のように青ざめました。

「いいでしょう。では、最後の試験です。もしあなたが、わたしが今思っているものを、あしたの正午に持つてくることができたら、あなたの妻になりましょう」

若者は、

（お姫さまが何を思っているかなんてわかりっこないし、まして持つてこられるわけがない）と、すっかりしずみこんで部屋にもどりました。男は、

「だいじょうぶ。わたしが、見つけましょう」といいました。

男は、鍛冶屋に行つて、剣に二十四ポンドの鉄をくつつけさせました。それから、家畜小屋に行つて、その剣でヤギの角の間をガンと打つていいました。

「お姫さまは、今晚、何時に恋人の所へ行くんだ」

「お姫さまは、一時に乗りに来る」

男が、三姉妹の帽子をかぶつて待つていると、お姫さまがやつて来ました。

「そら行け。屋根を越えて塔を越えて、大地を越えて海を越えて、丘を越えて谷を越えて、山でわたしを待つている恋人のもとへ」

ヤギは、すぐさま飛び立ちました。男はヤギの後ろに飛び乗りました。そして、飛んでいるあいだ、お姫さまを何度もぴしやりぴしやりと打ちました。ヤギは、たちまちトロルの山に着きました。

お姫さまは、トロルのすみににころがりこんでいいました。

「なんてひどい風なの。まるでだれかが、わたしを打っているようだった。傷だらけになつたわ」

お姫さまとトロルは、若者があの金の糸玉をどうやって手に入れたのか、いくら考えても分かりませんでした。お姫さまはいいました。

「最後の試験は、わたしが思っているものを、あしたの正午までに持ってくることで。そして、わたしが思っているのは、あなたの頭よ。あの若者にできるかしら」

「そりゃあ、できっこない」

トロルは、不気味な笑い声をあげました。

お城に帰る時間になると、お姫さまは、

「だれかがわたしのうしろについてくるようで、怖いわ」といいました。そこで、トロルは、

「じゃあ、いっしょに行つてやろう」といつて、自分のヤギに乗りました。男は、トロルのうしろに乗りました。そして、空を飛んでいるあいだ、トロルとヤギを、剣で打ちに打ちました。ヤギは、力がなくなつて、もう少しで海に落っこちそうになりました。それでも、お姫さまの後から飛んでいきました。そして、お姫さまがお城に帰り着いてドアを閉めたとき、男は、トロルの首を切り落としてしまいました。

つぎの日の正午、若者は、王さまのテーブルに呼ばれました。昼食の後、お姫さまは、
「わたしが思っているものを持ってきましたか」とたずねました。

「ええ、ここにありますよ」

若者は、トロルの頭を服の下から取り出して。テーブルの上に投げ出しました。

お姫さまは、若者と結婚するほかなくなつてしまいました。すぐに、盛大な結婚式が行われ、国じゅうが大喜びしました。

お祝いの宴会のとき、男は、若者をわきによんでいいました。

「いいですか。今晚ベッドに入ったら、あなたは、目をしっかり閉じて、眠っているふりをしなさい。そして、お姫さまが起きあがったら、九本のカバノキの若枝で作ったむちでお姫さまを打つて、お姫さまの体からトロルの皮をはがすんです。それから、お姫さまを、ミルクを入れた三つのふろおけに入れて、こすりなさい。初めに古いミルクのおふろ、つぎにバターミルク、最後に新しいミルクのおふろです。カバノキのむちはベッドの下に、三つのふろおけは、部屋のすみを用意してあります」

夜になつて、ベッドに入ると、若者は、男にいわれたとおり、目を閉じて眠っているふりをしました。お姫さまは、起き上がると、若者の髪やひげを引っぱつて、眠っているかどうか確かめました。若者は、丸太のように眠りこけていました。お姫さまは、牛切りナイフをふり上げて若者の首を切り落とそうとしました。そのとき、若者はとび起きてナイフを取り上げ、お姫さまの髪をつかみました。そして、ベッドの下からカバノキのむちを取り出して、お姫さまをたたきにたたきました。すると、お姫さまの体から、トロルの皮がはがれました。そこで、お姫さまを古いミルクの入ったふろおけに放りこんで、ごしごし洗いました。つぎにバターミルクの中でごしごし洗い、最後に新しいミルクの中で洗いました。お姫さまは、たいそう美しく、愛らしく、上品なすがたになりました。トロルの呪いは解けました。

つぎの日、若者は、お姫さまを連れて故郷に向かいました。

男は、トロルのすみかから運んできた金・銀・宝石と、お姫さまのたくさんの財産を、

トロルの六匹のヤギに積みました。旅を続けているうちに、ヤギたちが疲れはてて一歩も進めなくなりました。すると、男が、すべての宝と財産を、背中に背負って歩きまわした。

あと半マイルで故郷に着くというとき、男がいました。

「ここでお別れです。わたしはこれ以上あなたといっしょに行くことはできません」

若者は驚いて、

「いやだ。ぼくはあなたと別れたくない。新しいぼくのうちにいっしょに暮らしましょう。少なくとも、いっしょに来て、お祝いの酒を飲んでくれませんか」といいました。

「だめです」

「でも、どうやって、あなたにお礼をすればいいでしょう」と、若者がいうと、男はいいました。

「もし何かくれるというなら、これから五年のあいだにあなたが手に入れた物を、半分もらいましょう」

「わかりました」

かついでいたものをすべてそこに残して、男は行ってしまいました。

若者は、お姫さまを連れて帰り、新しい屋敷を建てて、盛大なお祝いの会を催しました。

それから、五年たった日に、男がやって来ていいました。

「さあ、あなたが五年のあいだに手に入れた物の半分をいただきます」

若者は、よろこんで、全てのものをきちんと半分にして、男に渡しました。すると、男がいました。

「まだ、もうひとつ残っていますよ」

若者が、

「これでぜんぶ、半分に分けましたよ」というと、男はいいました。

「あなたには、子どもが生まれましたね」

若者は、

「たしかに、そのとおりだ」というと、剣を抜いて、子どもをまっぴらに切ろうとしました。剣をふりおろしたとき、男が剣の刃先をつかみました。子どもはけがひとつしませんでした。男は、

「子どもを切らなくてすんで、嬉しくありませんか」とききました。

「そりゃあ、嬉しいですよ。今までの人生で一番嬉しい」

「わたしも、あなたが、教会のそばで、わたしを氷の柱から出してくれたとき、人生で一番うれしかった」

男はそういうと、約束の半分をそこに置いたまま、行ってしまいました。天国の鐘が鳴り響き、男は二度ともどつてきませんでした。

原話：『Tales from the Field』Peter Christen Asbjornsen

再話：村上郁